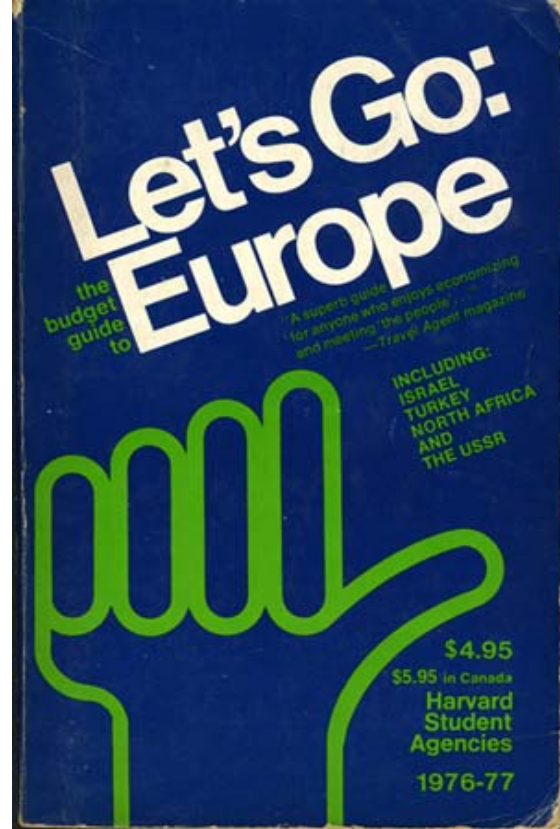


## 4 古典・現代建築歴訪の旅

### 4.1 旅の準備と英国の建築

卒業後すぐに働くことができたので旅費は何とかなるだろうと思った。ヨーロッパ周りで北半球を一周するルートで帰国するという計画を立て始めた。妥協をせずに出来るだけ多くの良い建築を見る計画を立てることにした。そのことがこの旅をどれほど厳しい旅になるか私は覚悟をしていた。訪れるべき国々、街々、見るべき建築等について調べはじめた。又、いかに安く、安全に、効率よく旅をすることが出来るかも調べだした。忙しい仕事の合間に、私はイェール大学建築学部の図書館に行き、ヨーロッパや北欧の国々の歴史や、建築について調べ、見たい街や建築物等のリストを作っていた。特に現代建築の走りとなった建築や、現代建築の巨匠と言われる、ル・コルビュジェやアアルトが設計した建築、私の恩師のジェームス・スターリングやハンス・ホラインの建築、中世の意義深い建築、そしてイタリアの山岳都市等々のリストを作っていた。

グループツアーの視察旅行とは異なり、自分で見るべき建築や街を選び、行くべき手段を捜すことはたいへん勉強になる。しかし、それだけ容易なことではない。この旅は建築を視察するだけでなく、人生のひとつの修業の旅ともなるだろうと思った。この様な旅は中世に遡り、「グランドツアー」と呼ばれ、イギリスの中流階級の子息は、人生修業として、単独でローマ



1976年、この本を持って旅に出た。  
最初、ニューヨークからブリュッセルへ飛んだ。

私のヨーロッパグランドツアーのルート、13カ国、21,000Km 完走した。  
若かったから、情熱があつたからとは言え、よくも計画を立てたものだ。





### 毎日のように雨だったロンドン

しろ、建築家の修業の場となっている。

2冊のノートブックに私がリスト化した建築や街を、限られた期間と予算の中で全てを視察するにはどうしたらよいか？それに私の見たい建築の多くは地方に分散している。大きな荷物を背負って、バスや電車の

### イギリスゴシック建築、ケンブリッジ大学のチャペルとキャンパス



### ケンブリッジ大学の歴史学部の建物、スターリング設計 1967年



まで古典建築歴訪の旅をしたという。近代になって、ル・コルビュジェも若い頃、旅をした。ルイス・カーンや、安藤忠雄や、香山先生も同じ様に旅をした。香山先生はテントを背負い、修道院に泊りながらの旅だったと言う。その時代、時代なりに異なった旅の方法がある。現代ヨーロッパは建築設計の仕事の場ではないに

スケジュールに合わせて旅をする、そういう旅は私の性に合わない。ましてなおみはリュックサックを背負って旅行する柄ではないし、とても出来る人ではない。パリで新車をリースして旅することにした。贅沢の様であるが、私が調べた中では一番経済的な手段であった。まずは行きたい所には自分のスケジュールで、どこにでも行ける。安いユースホステルやペンションを探せるだろう。最悪の場合には、車の中で食事も出来るし、寝ることも出来る。余分に金があれば、本を買いこむことも出来る。ヨーロッパ全土を走り回ると、車の宣伝にもなるのか、たいへん安く新車をリースすることが出来た。保険も含めて3ヶ月間で638ドルであった。その他にパリから日本行きの飛行機代2人分を購入する事も予定して、予算は3,000ドルしかなかった。独自に車で13ヶ国にもおよぶ



レイシスター大学の工学部の建物、スターリング設計 1963年  
ガラスのパビリオンのような彼の建築が多かった。



クィーンズカレッジ、ドミトリー、スターリング設計 1971年



サセックス大学の建物、ベッセル、スペンス設計 1960年

国々を旅することは、多くの危険が伴う。言葉も違う。習慣も異なる。当時はヨーロッパの各国で金銭も異なっていた。確かに、旅先で、危険な目に合うかもしれない。しかし、又、思いもよらない素晴らしいことに、出会うかもしれないも思った。自分の足で建物を探しながら旅をし、それらの素晴らしい建築を探しあてた時の感動がある。あるいは、本で見たほどの素晴らしさの建築ではなく落胆するかもしれないが、それでもいい。これが私の生き方である。

1976年10月1日、ニューヨークからブリュッセルに飛び、そこから電車でパリに向かった。パリの視察は旅の最後にして、パリで車をリースして、混雑しているパリをぬけだし、まず、カーフェリーでドーバー海峡を渡って、ロンドンに向った。私は日本ではドライブをした事がないので、左側ハンドルの車で左側通行のイギリスの運転は大変難かしかった。それに雨の日が多く、さらにドライブには難航した。

この旅で、私は新しい都市や街に着くと、必ずツーリスト・インフォメーション・センターを訪ねることにしていた。その街の、歴史的に意義深い建築物や、何か新しい素晴らしい建築物はないかを、尋ねることにしていたのである。そして毎晩、食事の後に新しい建築のインフォメーションを

もとにして次の日のスケジュールをたてなおし、必ず見なければいけない建物や街を再確認して、早朝に出発となった。イギリスは主としてジェームス・スターリングの作品と、古いゴシック建築が建ち並ぶ街々と大学と新しい集合住宅等を見てまわる計画をたてていた。スターリ

ングの設計した多くの建築は思ったよりも小さかった。特にレイシスタ大学、ケンブリッジ大学やクインズ大学の彼の作品は、外壁の大半はガラスでつまれ、微妙な角度のガラスの外壁やトップライト等の洗練された詳細が機械の一部でもあるようにとも思われた。創られたプランの方向性や軸になるべき建物へのアプローチは、明確なものであった。いつも薄暗い雨や曇りの日が多いイギリスでは、これだけのガラスの面を外壁に使うのは納得する。ヒッチコックの様な体格の持ち主のスターリングのイメージからこんなにも繊細なものをつくるには想像しがたい。もうひとつ面白いことには、彼は出版する彼の作品の写真一つ一つに彼自身が建物に対するスケールとして、小さく入っている。古い大学の街々オックスフォードやケンブリッジの建物、街々の空間を体験しながら北上した。雨の日が多く、大きなトラックの後について走って、追い越そうとする時は大変なリスクであった。フランスの車の左側ハンドルでイギリスの左側通行というのが完全に隣の反対車線に入らないと先が見えないのである。

スコットランドの首都エジンバラは中世の城の史跡にまじって古い建物と新しい建物がうまく調和されて建てられ、緑も多かったせいかわかかった。ここよりもう少し北上するとロックネスという細長い湖があった。その当時、その湖にはダイナソーの様な怪獣が棲み、時々、水面に現れるというニュースがあった。世界中で関心を持ち、日本からも調査団が来たという。私も興味があったので、半日のまわり道で、さらに北上した。ロックネスの細長い湖は、大地に切り込まれたかの様に、深い湖の中心部は水の色は濃く、今にも



ロックネスの湖に沿って崩れかけたいくつかの古いお城があった。



セントアンドリュース大学ハウジング、スコットランド、スターリング設計  
1976年、プレキャストコンクリートパネルの円い窓が印象的だった。

何か出てきそうであった。そこで車を止めてランチを食べながら水面を見ていたが何もそれらしきものは出てこなかった。細長い川のようなその湖に沿って南下し、スコットランドから、再び、イギリスへ戻った。2週間程ドライブして、だいぶ左側通行にも慣れてきたかと思ったら、又、右側通行のヨーロッパ大陸にカーフェリーで戻ることになった。